Well-Being INTERVIEW ❷

— 創作活動が培う生きる力 —

音楽に導かれる自分らしさ、めぐり逢いのウェルビーイング

ピアニスト、
相愛大学音楽学部・同大学院音楽研究科教授　**稲垣 聡** さん

（聞き手）　HEALTH PLUS 編集長　福岡 真理子

体育会系ファミリーの息子がピアノの道へ

——稲垣さんは桐朋学園、フランス国立リヨン高等音楽院とクラシック音楽家としていわゆる王道を歩まれていますが、音楽一家に生まれ育ったわけではないのですよね。

稲垣　父はバレーボール、母もソフトボールという体育会系の家です。ただ父はクラシック音楽が好きで、家には歴史的演奏家のレコードがたくさんあり、私もそれらに親しみました。五歳の頃、家族でオーケストラの演奏会に行ったことがあり、私は演奏中ほぼ熟睡（笑）。でもピアノ協奏曲の時だけはステージを凝視していたと。その時ピアノに取り憑かれたというか、「なんだ、これは？」と思ったようなんですね。

——子ども時代の体験は大切。強く印象に刻まれた。

稲垣　実際に私がピアノを習い始めたのは小学校一年生の終わり頃です。幼い私の「ピアノを習いたい」との言に、体育会系の両親は目が点になったようです。

——ともあれご両親は願いを叶えてくださった。

稲垣　床を補強して、アップライトピアノを家に入れてくれました。伯母の話によると、私はピアノを習いたいと言っては熱を出していたそうです。

——以降はごく自然に音楽の道へ？

稲垣　私自身は「ピアノを弾く自分」がごく当たり前になっていて、音大進学を鑑み、地元の音楽科のある滋賀県立石山高校へ行こうと。でも母は、ピアノは楽しみの範疇・職業音楽家になるなんてとんでもないと大反対で。

——でもやはりお許しくださったんですね。

稲垣　はい。しかし石山の音楽科に入って、そこで音楽をゼロから学び直すことになりました。読譜もテクニックも、それまで感覚的にしかやっていなかったことを思い知りました。高校三年間はとにかく大変でした。

——けれど名門・桐朋学園大学にお入りになった。

稲垣　最初は東京芸大志望だったんですが、東京芸大は受験講習会などをやっていなかったので、具体的な様子

がわからない。そこで東京の様子見のつもりで、同等レヴェルの桐朋の夏期講習会を受講した時に「えっ、桐朋は自分にあっているかも」と直感したんです。今思えば、東京芸大は国立で最高峰で凄く狭き門である分、基本的な能力やレヴェルが高く、全てにおいて優秀でないと入れない。けれど私立は少し違う。何か足りない所があっても、別の所で抜きん出た才があれば、そこから四年かけて伸びていくだろうと判断してくれる。

――つまりは「個」の尊重。大いに共感を覚えます。アートこそ、個の煌めきの世界だと思いますし。

音楽教育の現場で多様な若者たちをいかに導くか

――フランス留学後、ピアニストとしての稲垣さんの国内外でのご活躍は素晴らしく、また大学音楽学部でも長年教鞭を執っておられます。小誌は今、教育機関とのコラボレーションを進めていることもあり、音楽教育の現状にもとても興味があります。日々学生たちを薫陶するに当たり、近年どういうことをお感じになりますか？

稲垣　音楽のこと以前に、人間の根っこの部分のケアの必要性を感じることが多いです。これは大学だけではなく、初等・中等教育でも教職にある者は皆、感じていることかもしれません。また、学生の探求心の希薄さを感じることも多いです。大学図書館の利用者数も年々減少していますし。ネットでさまざまな情報や考え方を一通り集め、自分の意見として提示できたらそれで良しとしてしまう。あと、当然知っているべきことを自分は知らなかった、ということってありますよね。そういう時も「知りませんでした」で終わり。危機感を覚えて必死で調べるという感じがなかったり。ネットでいつでも確認できるという思いがあるからなのでしょうか。

――何か一つ知識を得たら、そこを出発点に考察を深めて欲しいですね。そういうフォローも必要なんですね。

稲垣　もちろん、自ら一生懸命調べて、学びを深めていく学生もいます。特に大学院まで上がってくるような学生たちは、覚悟を持って勉強してきます。

――音楽で生きていくという覚悟を。

稲垣　高校から大学に上がる時、本来はその専門を極めようとして来るものです。けれど学生たちはさまざまで、音楽が好きだから頑張りたいけれど、見つけるべき道が分からない、という子もいます。ピアノ専攻の私としては、ピアノや音楽における基本的なことをまず身につけてもらい、専門的なことも勉強してもらうわけですが、学生たちに接する中で、技術修得や一曲一曲を仕上げる時のプロセスこそが大切だと思うようになりました。

厳しい創作のプロセスで発見する自分の胆力とウェルビーイング

稲垣　例えば音楽大学では演奏の実技試験があります。演奏するためには必ず、その曲を仕上げなければなりません。5分以上の曲を年に二回。卒業試験ともなると最大35分の曲を弾いて審査されるわけです。実技試験のプロセスをとおして、学生は物凄く鍛えられる。曲を組み立てて仕上げていくことに多くの時間を要します。読譜に始まって、最初は至極ゆっくりなテンポから。指導者は実にこまかいところを指摘していくんです。中には非常に困難な曲を希望してくる学生もあります。

――自分の希望する曲を弾かせてもらえるかどうか。学生はまず、その曲を弾けるようになる可能性の有無を、指導者に判定される試練に向き合わねばならない。

稲垣　それらのプロセスを学ぶと、絶対に人生の何某かにつながっていく。皆、逞しくなりますよ。演奏家志望の学生たちに対してはさらに厳しく接します。今のままでは不充分、根本的な考え方を変えなければと。

――学生全員が、音楽の世界に進めるわけではないのですよね。音楽家になれなかったとしても、演奏の鍛練の過程で人としての胆力を養った自分に出逢える。

稲垣　音楽の世界で仕事を得られなくて「四年間かけて教えてくださったのに結果を出せなくて申し訳ありません」と卒業時に謝ってくる学生もいます。そういう子たちには言うんです。「あなたが四年かけて頑張ったことは全てがあなたの糧になっている。絶対にこれからの人生で活きてくるはずだ」と。そう言って送り出します。

――そういう時の先生と学生の心を思うと、凄く沁みるものがあります。そしてやっぱり大学は、一生懸命頑張って達成感も挫折も味わいながら、これからの長い人生の準備をする場所なのだと改めて思います。

稲垣　ピアノ専攻で卒業したものの、声楽専攻の三回生に編入し直したいという学生がいました。彼女から相談を受けた時に「ピアノは音楽を学ぶ上で必要。だからピアノ専攻で学んだことは絶対あなたの歌に活かせる」と励ましたんです。彼女は声楽で大学課程を終えて音楽専攻科と大学院に進みました。オペラ公演で初めて役が付いて立派に歌っている舞台を見た時は、感動しましたね。

――それこそが大学で学ぶ意義。自分の可能性追求の

ために、逡巡や仕切り直しが許されているのが大学時代です。多様な個々の多様な幸せの模索が、ウェルビーイングな人生の素地をつくってくれるのですものね。

音楽を通して再確認できる自分自身 そして、広がり、つながる人生の輪

――ご自身の音楽人生を振り返られ、これからを展望されて、今どのようなことを考えておられますか？

稲垣　五年後に私は還暦を迎えます。節目となるコンサートを考えていますが、それにはやっておかなければならないことがある。自分のピアニスト人生を思う時、より多くの引き出しや技術を持っていたいのです。そうなると、原点に還る作業をしなくてはなりません。

――原点というと、音楽上の原点とご自身の原点。三年計画で取り組んでおられるベートーヴェン・シリーズ『ルートヴィヒの遺言』[*①]も、その一環なのですね。

稲垣　そもそも私はピアニストとして歩み始めた頃から、近現代、特に20世紀音楽を中心にやってきました。『ルートヴィヒの遺言』ではベートーヴェンという古典に還りつつ、近現代の作品をそこに組み合わせるということをやっています。これも還暦を控え、自分の人生が一巡りするからという思いがあってのことです。「何故君がベートーヴェンなんだ」と思われたり、自分でも悩みましたが、20世紀の作品だけになってしまうと自分が凝り固まって、それしかできない人になってしまうと思ったんです。それに古典に立ち還ることで、自分にとっての20世紀音楽の意義を再認識できました。やはり私自身が最も相性の良さを感じるのは20世紀音楽で、私にとっては最も豊かに物語れる言語のようなものです。世間的に人気の領域とは言い難いですが、だからこそ発信しなければ。作品というのは演奏されてこそです。演奏され、長い時間をかけて価値付けられてゆくのです。

――今「古典」と言われる作品も、生まれた時は現代音楽だったわけですものね。そういう稲垣さんの背中を見て、若い音楽家たちがまた何かを学ぶ循環が生まれる。

稲垣　幸いに私は、音楽をしていく中で師匠や音楽仲間など、本当に温かな出逢いに恵まれました。昔ある女性演奏家と共演した時、彼女は身籠っておられた。そして最近ある若い演奏家が、私がコーディネーターをしている演奏会に出演してくれたのですが、その人がかの女性演奏家のお腹の中にいたお子さんだったということも。ご縁ですね。

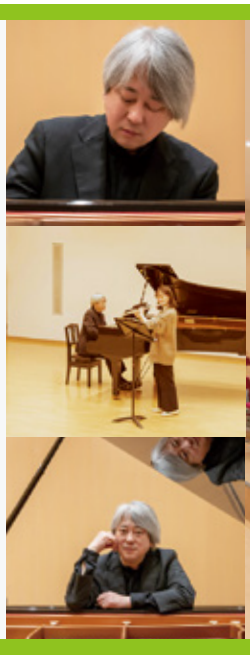
――素敵なエピソード。良き人生には、良き出逢いと別れのめぐり逢い――ソーシャル・ウェルビーイングがありますね。稲垣さんにはこの夏、ショパンとリスト、彼らと深い縁を結んだ女流作家ジョルジュ・サンドをフィーチャーする朗読音楽劇場[*②]へのご出演を小誌よりお願いしていますが、これのテーマも出逢いと別れです。

稲垣　あらゆる音楽作品の背景には、その作者の人生の物語があります。このコンサートは朗読によって、それがくっきりと浮かび上がり、より感じられる形になりますので、味わい深く愉しんでいただけると思います。

――制作の私どもとしても、とても楽しみです。これからの稲垣さんの音楽家人生がより稔り多きものとなりますよう。今日はありがとうございました。

稲垣 聡
（いながきさとし）

バッハから新作初演、ダンス、美術、オペラなど多ジャンルとのコラボレーションに取り組む多彩で幅広い活動を展開するピアニスト。特に近現代作品の演奏にはその深い洞察力と表現により定評がある。精鋭音楽家集団アンサンブル・ノマドのメンバー。桐朋学園大学音楽学部卒業、フランス国立リヨン高等音楽院大学院修了。1991 年平和堂財団芸術奨励賞、東京現代音楽祭室内楽コンクール《競楽Ⅰ》入賞、1992 年第４回宝塚ベガ音楽コンクールピアノ部門第１位・特別賞、2003 年滋賀県文化奨励賞受賞。リサイタルなどのソロ活動をはじめ、国内外のアーティストとの共演やレコーディングなどアンサンブルピアニストとしても活躍。20 世紀音楽の分野においても、国内はもちろん海外からも招かれ、高い評価を得ている。オペラにおいてはその造詣の深さから、創作オペラ制作や音楽スタッフ、演出にも携わる。



撮影：相愛学園本町学舎にて

＊①ルートヴィヒの遺言：今秋 Vol.Ⅲ《遺言～最晩年の傑作～》。今号P11にてご案内
＊②朗読音楽劇場：『ショパンとリスト～出逢いと別れのエチュード～』。今号P11にてご案内

Summer

朗読ヒーリング® 協会設立記念 ウェルビーイング体感支援作品　朗読音楽劇場 Op.1

ショパンとリスト～出逢いと別れのエチュード～

2023 年 7 月 17 日（月祝 / 海の日）
開場 18:00　開演 18:30
あいおいニッセイ同和損保 ザ・フェニックスホール

物語の舞台は 19 世紀フランス・パリ。そこは
爛熟のサロニエールたちの聖地。ジョルジュ・サンドという
一人の女性の目線を通し、
「間（はざま）の時代」ならではの光芒の中、
今をひたすらに生き、愉しみ、愛し合った
芸術家たちの人生譚と名曲秘話を
朗読劇と演奏でお贈りいたします。

◆主催◆朗読ヒーリング® 協会
◆脚本・演出◆張 かんな
（コンポーザーピアニスト / 脚本家）
◆総合プロデュース◆福岡真理子
（ウェルビーイング可視化事業プロデューサー /
（有）女性と健康社）
◆企画制作◆WBP ウェルビプロジェクト

＊チケット販売につきましては、詳細決定次第
小誌 HP にてご案内いたします。
＊早割りチケット購入者限定インセンティブとして、
豪華な事前レクチャーを予定しています。

女流作家 / サロニエール / ストーリーテラー
ジョルジュ・サンド

三浦 摩紀
［祝言朗読家®］

作曲家 / ピアニスト
F・ショパン

風莉 じん
［元 宝塚歌劇団男役］

作曲家 / ピアニスト
F・リスト

くれ ゆか
［元 宝塚歌劇団男役］

演　奏

稲垣 聡
［ピアニスト / 相愛大学教授］

Autumn

稲垣聡ピアノリサイタルシリーズ（全 3 回）

ルートヴィヒの遺言～最後の 3 つのソナタとともに～　Vol.III

L.v. ベートーヴェン ＋ C. ドビュッシー 生誕 160 年*《遺言～最晩年の傑作～》

＊新型コロナウイルス感染症の影響により、一年 ずつ延期開催となります。

ベートーヴェン “最後の 3 つのソナタ” と近現
代作品が交差する、ピアニスト・稲垣聡氏の 3
か年プロジェクトが今秋いよいよファイナル！

A. ウェーベルン：ピアノのための変奏曲 op.27
L. v. ベートーヴェン：ピアノソナタ第 32 番ハ短調 op.111
C. ドビュッシー：12 の練習曲 (1915)

［大阪公演］2023 年 11 月 22 日（水）
開場 18:30　開演 19:00
あいおいニッセイ同和損保 ザ・フェニックスホール
お問合わせ：おふぃすベガ TEL 0798-53-4556（平日 10:00 ～ 18:00）

［東京公演］2023 年 11 月 28 日（火）
開場 18:30　開演 19:00
東京オペラシティ リサイタルホール
お問合わせ：ブルーシート T EL 070-4123-4772（平日 14:00 ～ 17:00）

◆主催◆サウンド inn 企画　◆料金◆大人 3,500 円（当日 4,000 円）　学生 2,000 円（当日 2,500 円）